

とうゆう

糖友ニュース

第91号

平成20年7月1日 発行

編集人：とうゆうニュース編集委員会
委員長 松葉 育郎

発行人：関東甲信越地方連絡協議会
会長 大槻 瀬平

発行所：(社)日本糖尿病協会
関東甲信越地方連絡協議会
〒231-0047 横浜市中区羽衣町2-5-1 宮本第2ビル2階
TEL 045-260-6658 FAX 045-260-6480

糖尿病 最新的话题紹介

インスリン注射が不要になる日を夢見て

栃木県推薦理事・支部長
自治医科大学内分秘代謝科教授

石橋 俊



みなさんは、現在受けている糖尿病の治療に満足されていますか？一般に、糖尿病の治療法に対する満足度は極めて低いとされています。なぜなら、病気そのものを治すことができないからです。姑息的な治療を延々と生涯にわたって継続しなければならないからです。画期的な治療法が切望されるゆえんです。そこで、糖尿病の治療法の進歩についての現状を紹介したいと思います。

血糖を下げるお薬の選択肢も広がりつつあります。腸管から分泌されるホルモンの一部に、食後のインスリンの分泌を助ける作用があることが知られていました。インクレチンと呼ばれるホルモンです。インスリン注射と同じように、注射するという方法もありますが、ホルモンが壊れないようにするDPP4阻害薬という内服薬が開発されました。それを服用すると、GLP-1と呼ばれるインクレチンの血液中の濃度が増えて、血糖上昇が抑えられます。

血糖の正常化には肥満の是正も極めて大切です。その場合、食事の制限が最も重要ですが、現実には、食事療法の維持が困難な場合が少なくありません。どうしても、食事制限は無理という場合にもお薬の力を借りることになります。現在でもそのようなお薬が1種類使えますが、使用方法に制限があったり、体重がリバウンドしたりで、特効薬という感じではありませんでした。ところが、この領域のお薬の選択肢も増えることになりそうです。シブトラミン・リモナパン・オ

ルリスタットなどと呼ばれるお薬です。もうひとつの選択肢に外科療法があります。従来は、胃を小さくしたり、食べ物吸収される腸の部分の短くしたりする手術が主流でしたが、最近では、内視鏡を使って、食道と胃の間の通路を外側から輪をかけて狭くする方法が普及してきています。開腹は不要で、元に戻すことができるという、お手軽な治療です。

インスリン注射に変わる方法として膵臓移植・膵頭移植があります。うまく行けば、前者はインスリン注射が不要になります。後者でも、ガタガタした不安定な血糖の乱高下はなくなります。しかし、日本では、ドナーが不足し、膵頭を調整する試薬の供給がストップしたりして、こうした治療法を受ける患者さんの数は2桁止まりです。そこで注目されているのが、インスリン製造工場とも言える膵β細胞の再生治療です。1年前までは、ヒトES細胞から膵β細胞を作ろうという研究が主流でした。しかし、ヒトの受精卵の仕様に付随する倫理的制約や拒絶反応の問題が障壁になっていました。京都大学の山中伸也教授らが開発したiPS細胞が、ES細胞に代わる方法として、昨年来熱い注目を集めているのは、テレビや新聞でご存じだと思います。iPS細胞は自分の皮膚などから作れるため、ES細胞に付随する問題がありません。残された懸念である発ガン性の問題が解消されれば、意外に実用化は早いかもしれません。